
オトシヨリは大切に

会津遊一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オトシヨリは大切に

【Nコード】

N3825H

【作者名】

会津遊一

【あらすじ】

Sはやり手の営業マンである。頻りに肩を揉ませてくれ、と頼んでくる後輩のNを引き連れて、お得意様を回っていた。二人が社長という嫌われ者に会いに行くが、そこは以前とは違う雰囲気の下で……。

Sはやり手の営業マンである。

今日は、新人社員のNを引き連れて、最初の得意先に向かっていた。Sの仕事ぶりをNに見学させてやってくれと、上司に無理やり頼まれたのであった。

「だがね、N君、私は誰かに教えるなんて本当は苦手なんだよ。これつきりにして貰いたいものだね」

「すいません、ご迷惑をかけて。お礼に肩でも揉みましようか？」

「いや、いいよ」

「それぐらい、やらせて下さいよ。お礼がしたいんです」

「君は、そればかりだな。お礼とやらは、少しでも会社に貢献できてからにしてくれよ」

二人は○×会社の受付でアポを取り、L社長を呼び出し貰った。ここの社長は嫌われ者で有名なので、Sは立ち上がり挨拶した。

「どうもL社長、ご無沙汰しております。それと、こちら同僚のNです」

「そうか、こんにちは」

会釈をすませたSは、L社長が横に振り向いた時、首元に灰色の紙が付いていることに気が付いた。

「あれ、首の後ろにゴミが付いてますよ」

L社長は首を触るが、何も掴めなかったらしい。

「はい、お茶とお菓子をお持ちしましたー」

二人の会話を邪魔するように様に、○×会社の女性社員が飲み物を3つ持ってきた。

彼女は、まずL社長からゆっくりと湯飲みを手渡していた。

「おお、そうか、ありがとう。ついでに、お尻にもお礼を言っておこうかな」

「もうダメですよー」

Ｌ社長がセクハラするも、女性社員もまんざらではない様に、仕事に戻っていった。

彼女はＬ社長から見えない位置まで行くと、手にした１万円札を財布に入れていた。

「ふふ、よく気が回る子だろ。この会社は社員が家族ぐるみの様に接するというのが強みだからね」

Ｌ社長が気分を良くしていると、今度は別の男性社員が近寄ってきた。

「ちわ、肩でも揉みましようか？」

「おいおい、お客様が来ているのに、ちわは無いだろっ」

怒ってはいるものの、Ｌ社長は気持ちよさそうに肩を揉まれていた。

「まいどー」

やり終えた男性社員は、仕事に戻っていった。

その時、彼はいつの間にか手にしていた１万円札を、ポケットに突っ込んでいた。

Ｓは二人の行動を全て見ていた。

「……」 Ｌ社長は色々と人気があるようですね」

「ははは、まあな。やっと若い世代とも会話できる様になったよ」

「なるほど。私も一つ肩を揉んでも宜しいでしょうか？」

「いやいや、もう結構だよ。やり過ぎると、心臓の方が痛くてね。君とは同じ年だが、私の方が先にガタがきたのかもな。昔はこんな心臓が締め付けられなかったんだが」

「でしたら尚のこと、肩もみをさせてください。私も日頃お世話になっている」 Ｌ社長の健康が心配なんですよ」

Ｓは社長の背後に回ると、まず彼の首元を見た。

そこには皮膚の隙間から灰色の紙が突き出ていた。

好奇心に駆られたＳが軽い気持ちで引っ張り出すと、ニユルツと新しい一万円札が出てきたのである。

「どうかしたかい、S君」

「……いえ、何でもありません。しかし、この会社は本当に素晴らしいですね。普通でしたら、社内に多少のギスギスした空気が流れるものですが、ここは全くそれがない。気軽に社長とスキンシップをする、それが大事なんですよ」

Sは社長から隠す様に、一万円札をポケットに入れていた。

○×会社を出た二人は、次の会社に顔を出す前に、近くのお店で昼飯をすませることにした。

「N君、一緒に営業が上手くいったお祝いだ。今日は私がご飯を奢るよ。好きなものを食べてくれたまえ」

「ありがとうございます。しかし、お返しに何もしない、という訳にも行かないですよね」

Nは爽やかに笑い、Sの背後に回り込んだのである。

「おいおい、一体何をするつもりだ？」

「軽く、肩を揉むだけです。S先輩も言ってたじゃないですか、スキンシップが大事だと。それこそが、会社で成功する秘訣だったんですね。僕は、そういう当たり前の常識が欠けていたようです。先輩には毎日でもスキンシップしたいぐらい感謝しています」

「そうか、分かってくれたのなら、それで良いんだ」

二人は会計を済ませ、店の外に出た。

だが、後輩のNが一人で何処かに行こうとしているので、Sは呼び止めた。

「おい、そっちは次の訪問先じゃないぞ」

「ちよっと、先に行ってて下さい。銀行にお金を預けてから、追いかけます」

そう言うNのポケットは一万円札の束でパンパンに膨らんでいたのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3825h/>

オトシヨリは大切に

2010年11月21日02時44分発行